

寂聴さんと永田洋子

草の実 アイ

「寂聴」に初参加します私は、読書好きで、特に過去の日本人の作家さんのものを読んでいる人間です。読んだ中に色々好きな方、興味ある方がいる私ですが、寂聴さんに對しても私が目をひかれる所があります。それは社会運動家、行動家、また宗教家の所で、この文では、寂聴さんのこの姿が表われている『瀬戸内寂聴・永田洋子往復書簡』という書を読んで思った事を書きますので聞いて下さい。

この本の存在は2023年に知りました。始めに、この本の存在または内容をよく知らない方のために説明します。彼女は1970年代初め頃、革命、変革をとえ、仲間を計14名死に至らしめた人間で、東京拘置所に拘束され、裁判にかけられました。獄中で寂聴さんと書物を通じて知

り合い、書簡が往復されるようになった、ということです。永田洋子から寂聴さんへは、計300通を超える手紙を出し、「大好きな寂聴さん」と言ったり寂聴さんのウツを心配したり、獄中で描いた自分の絵を送ったり、獄中の食事内容の報告をしたりしています。もちろん自分が殺してしまつた仲間への色々な想いなども書いています（寂聴さんのウツとは？少し気になります）。

それに対し寂聴さんから永田洋子へは、手紙の返事は10回に1回程度し、差入をし（主に衣類など）、接見をし、弁護士に頼まれて裁判の証人に立ち、要するにできるだけ付合つたのです。永田に合わせて絵まで描き送っています。もちろん殺人者に対して、これからはこうやって生きてい

て欲しい、などとも書いています。

では、私が往復書簡を見て思った事。まず、永田の文を読んで、私が、この人の文を読んでよかった“などと感心する内容は一つもありませんでした、また大きく反発するような事も書いてありませんでした、どうという事がないものにも思えました。寂聴さんも永田に対し中身のある人などと評価はしていません。やっぱりそうだったのか、あの当時、(1960年代〜70年代)この程度の中身の人間が社会の指導者になろうとしていたのだな、と思いました(一人一人違うと思いますがこういう人も少なからずいたという事です)。彼女たちの行動の基は、”自分の理論“でした。ここから私が解った事は、人生の指針、社会の向かうべき所を示す人はただの「理論家」ではダメだ、「思想家」でなければいけない、という事でした(理論家と思想家はどう違うかはここでは詳しく書かず、思想家とはモノを深く考える人だと言っておきます)。

寂聴さんの対応について思った事。付合いがマメだなあ、大変お忙しかったであろうにもかかわらずやったな、という感心がまず一番です。やり取りが雑誌に載るということで、寂聴さんが社会的使命を感じていたのかもしれないと

しても。

寂聴さんの永田への接し方や手紙の内容については、差入などをしているところを見てもわかるように、”どんな人にも等しく優しく接する“という態度であって、殺人を責めたり、”反省しなさい“とお説教をしたりしてはいません。こういう態度もなかなかできるものではないでしょう、多くの人には嫌悪感などが出てきてしまうのではないかと思うので。お説教じみた事をほとんどしていないのに、永田はこの寂聴さんの態度に誘われるように安心して寂聴さんに本心を述べたり反省したりしています。ここで思い出したのは、イソップ物語の”北風と太陽“です。勉強になると思いました、人に反省させたかったり、自分の心をよく見て考えてみなさい、と言いたい時に取る態度にはやっぱり”太陽“がいいのだな、という事が。

また寂聴さんに感心した所の次。裁判の前に弁護士さんが”寂聴さんと打合せをしましょう“と”言ってきたのですが、寂聴さんは”打合せは長くやらなくても大丈夫“というところで、簡単な打合せだったのに、裁判での証言はバッチリだった所(証言記録も本に載っています)。こら辺さうです。書齋で文章を書いているだけの方には簡単にできる

芸当ではないでしょう。

私は、以上書いた所に行動家、社会運動家、の寂聴さんの特異性を見、目を見張るのです。

では次に、こういう記録は現2023年には必要ないのかどうか？について考えてみます。裁判も終わって数十年経ち、この事件は終わった事になったのか？私はそうは思わない、ということを書いてみます。

他国を見ると過去、中国の文化大革命で知識人たちが迫害された、また赤色クメールと言われる人たちによって、カンボジアで何百万人の人が虐殺された、という事がありました。どちらも迫害したり殺した側の人たちは若年層がほとんどであったと言われています。こういう事実を見ても、日本だけではなく人類は理論だけで社会の物事を進めると永田のような行動を取る可能性がある、と言えると思うのです。そして日本だ世界だに関わらず、今後同様な事が起こらないとは限りません。

考えてみれば、サリン事件を起こした自称宗教集団とか、最近話題になった金集め集団としか見えない自称宗教集団（苦しんでいる人がいる）なども、形は違うが永田事件と同じ構図に見えます。すべて、深い思想が感じられない、の

です。

そう考えてくるとヒットラーの『わが闘争』も人類の記録としてとっておく必要があると同じように、寂聴さんのこの記録もとっておくべきではないかと思うのです、私は。そして人類の教訓にすべき所は教訓にしていく必要があるでしょう。

その他、本には面白い事が載っていました。永田からは、同時期中元首相が拘留所に入ってきた事があって、その時だけ食事内容がよくなった事や（どうして？と思う）、寂聴さんからは、裁判長の判決文の読む声が小さくて聞き取れなかった事や（こういう人でも裁判長は首にならないのか？と思う）、証人に出廷した寂聴さんが、言われた通りに掛かった費用を請求したら即座に決まった金額が渡されて、足が出たという事や（これでいいの？と思う）。日本人であれば、裁判所等の事は知っておいた方がいいだろう、とも思いました。

なお、V o l 1 の瀬尾まなほさんの文章、秘書さんの眼からの寂聴さんの姿が見られて興味深かったです。以上、草の実アイでした（2023年4月に自著を初出版しました）。